



# の み が わ

2009年5月1日発行(通算第53号)

連絡先 〒146-0085 大田区久が原4-19-24

発行 大坪庄吾方 呑川の会

呑川の会 e-mail [s.ootubo@nifty.com](mailto:s.ootubo@nifty.com)

呑川の会 HP <http://home.m00.itscom.net/nomigawa/>

高橋会員 HP <http://homepage2.nifty.com/aoiyume/>



## (第2回) 呑川シンポジウム開催要項決まる!

—— 呑川に鮎を取り戻そう ——

(福井 甫 記)

大田区後援 2009/6/27(土) 予定

呑川はご承知の通り、工大橋から新幹線横断地点までは全く魚は生息していませんが、新幹線から仲之橋までの未改修区間はウナギ、ナマズ、マハゼ、ボラ、マルタ、スミウキゴリ、それに鯉等の魚が生息し、その魚を捕食するコサギ、カワセミ、カワウ等の野鳥も見られます。呑川の中では魚の生息が多い区間でしよう。

その未改修区間を都建設局は護岸補強のため改修工事を計画し(一部実施)、現状が大きく変わろうとしています。

私たちはまず現状の魚の生息環境は維持し、更により豊かな魚が生息する呑川になることを望みますが、一方洪水対策を中心とした制約条件も多いことも事実です。しかし魚等の生きものの生息しない川・池、それはまさに死の川、死の池で考えただけで恐ろしいと誰もが感じることでしょう。

いろいろな制約条件があるにせよ、その中で一步でも前進できないか、その一つのきっかけになればと、次の通りシンポジウムを企画しました。ご多忙とは思いますが是非ご参加ください。

なおこのシンポジウムは大田区の後援を得られましたことを付記します。

開催日時	6月27日(土) 13時30分~16時	
会場	大田区消費者生活センター大集会室 (定員120名)	
内容		
基調講演	東京海洋大学海洋科学部	丸山隆 助教
報告	都建設局河川部計画課	大橋一尊さん
パネルディスカッション		
パネリスト	呑川の会 呑川の魚・野鳥	高橋光夫さん
	大田区環境保全課	稲葉明子さん
	大田区都市基盤管理課	明立周二さん
	日本工学院学生課長(前環境科学科科長)	猪口眞美さん
	久原小学校 総合学習“呑川”の紹介	高橋邦子さん
	神田川ネットワーク	代表 糸井 守さん
	グループよみがえれ目黒川	代表 渡部重行さん
	東京工業大理工学研究科修士課程	小林賢司さん

## 会場との自由討議

申 込 先着順 入場無料  
主 催 呑川流域ネットワーク連絡協議会  
後 援 大田区

# 目黒川・お花見ウォーキング

(白石 瑠朗 記)

2009/4/4



4月4日(土)桜の開花・天気両方の予報が良い方向に狂って、桜もちょうど満開、晴天で18度と暖かい絶好な日のに、大崎駅から16人が9時40分スタートしました。今回のウォーキングは齊藤 正さんによる、荏原調節池・川の資料館見学の申込と、御成橋で芝浦水再生センターからの再生水の間欠噴水見学、亀の甲橋・高濃度酸素浄化実験見学と中身の濃い案内でした。

まず桜並木の右岸を下り、旧森永製菓工場跡の森永橋から目黒川の左岸を上流に向かって歩き、3つ目の赤い御成橋で、ちょうど再生水の噴水が始まり、やや緑色かかった比較的美しい川に流れ込み見所でした。次の山本橋左岸に観光対策の船入場の完成まじかを見、五反田大橋手前左岸の川の壁に「都営地下鉄排水口」と大書した流れを見て、呑川も川壁に明示して欲しいなと思った。



11時頃に谷山橋と市場橋間左岸の「荏原調節池」に着き、都の職員3人から丁寧な説明と案内を受けた。五反田近辺の水害対策として、平成13年に荏原市場跡地を利用して、水位上昇時に一時貯留するための取水施設(4層式・20万m<sup>3</sup>貯留)を完成させ、50mm/Hに対応した。1層目をヘルメットを被り、懐中電灯を持って1時間程見学したが素晴らしさに圧倒された。



次の亀の甲橋の半分を使った、品川区の「高濃度酸素溶解液実験施設」を見た。目黒区もこのすぐ上流に高濃度酸素浄化施設を今年度設置して、両区で実験するとのこと、呑川も大田区と東工大の共同開発で来年あたり新装置を設置するとのこと、城南3区の取り組み結果が楽しみです。

## 目黒川水質改善実験 実施中


**実験概要**

**実験場所** 品川区西五反田3丁目11番地先

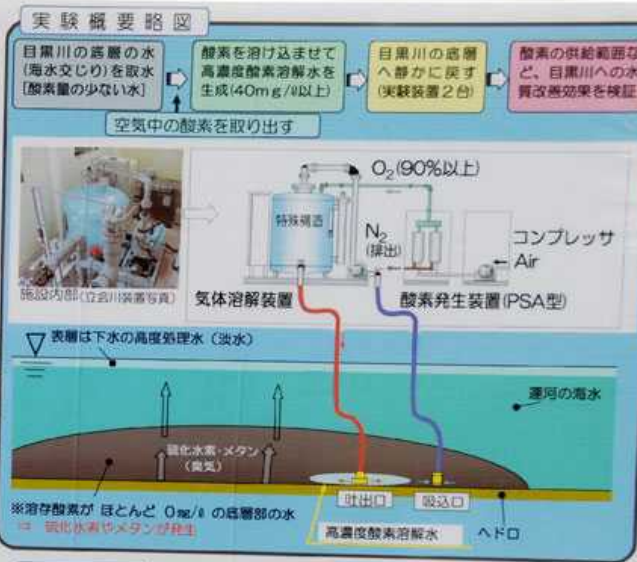
**実験内容** 水中の酸素不足が原因で臭気や白濁の発生している河川の底層部分に、高濃度酸素溶解水を供給し、目黒川への水質改善効果の適用性を検証する。

**実験期間 (予定)** 平成20年7月下旬から平成22年3月下旬まで

**白濁現象 (H2O.6.3)**



**実験概要略図**



目黒川の底層の水(海水交じり)を取水(酸素量の少ない水) → 酸素を溶け込ませて高濃度酸素溶解水を生成(40mg/l以上) → 目黒川の底層へ静かに戻す(実験装置2台) → 酸素の供給範囲など、目黒川への水質改善効果を検証

空気中の酸素を取り出す


特殊構造 気体溶解装置 O<sub>2</sub>(90%以上) N<sub>2</sub>(排出) コンプレッサ Air

酸素発生装置(PSA型)

※溶解酸素がほとんど0mg/lの底層部の水 → 炭化水素(メタン)が発生

高濃度酸素溶解水 ヘドロ

**亀の甲橋 設置図**



【亀の甲橋平面図】 - 6mプランター

石岸 在岸

橋長 27.2m

6.6m 6.5m 1.0m 6.5m 6.6m

【亀の甲橋横断面図】

【亀の甲橋通路断面図】


通路幅 5.5m

3.5m 2.0m

4.2m

橋脚幅 7.9m

**配置図**



目黒川水質改善実験施設


亀の甲橋

吸込口

吐出口

市場橋

**吐出時の状況**



2カ所の吐出口から高濃度酸素溶解水を放流しています。同時に空気泡が発生しますので、水面上からも、吐出口の位置がわかります。

**発注者** 品川区まちづくり事業部下水道河川課下水道整備担当

稲田、落合 電話 03-5742-6795 (直)

**受託者** 株橋崎製作所 東京支店

佐藤 貴 電話 03-3572-3761 (直)

山内 勇一 (現場代理人)

電話 080-1895-9966 (夜間・休日)

ご通行の皆様、近隣の皆様には、実験中大変ご迷惑をお掛けしますが、ご理解とご協力をお願い申し上げます。

さて、雅叙園の手前から目黒川は両側とも満開直前の見事な桜並木が続き、江戸名所図会でも有名な太鼓橋を過ぎ、桜見物の人で一杯になってきました。目黒新橋から見下ろした桜に挟まれた目黒川は、中々な風情でした。田道橋を渡り、江戸時代に目黒不動に向う旧道にある大きな庚申塚を見て、やっと1時に中目黒公園で昼食です。今日は人が多いので入場禁止の芝生広場が特別に開場となったので、皆で車座になりビールで乾杯して、楽しい昼食となりました。

食後すぐ次の田楽橋を渡ると、右岸に「目黒川舟入場調節池」があり、その目黒区立「川の資料館」(土・日・祝日開館)で「目黒川のしおり・A5判8P」をもらい、新津さんの案内で見学しました。呑川の古い写真や資料も多くあり、城南の河川の資料が豊富で、3時の解散まであつという間に時間が過ぎた感じで、有意義なウォーキングの1日を過ごした思いで無事終了しました。

## 大田区との意見交換会日程 決まる

2009/5/26 (火) 予定

(福井 甫 記)

昨年実施している呑川ネットと大田区との意見交換会の今年上期の日程が決まりました。

開催日時 5月26日(火) 10時から12時予定

会場 大田区役所9階902会議室

なお当日呑川ネットから大田区に対する意見・要望事項等につきまして次の日時で検討します。

開催日時 5月13日(水) 13時30分

会場 大田区消費者生活センター2階グループ活動室

## ボート de 花見とごみ拾い in 呑川

(白石 瑠朗 記)

2009/3/29



3月29日(日)の13時から夫婦橋親水公園から御成橋付近まで10人乗りのEボートに乗り、乗船した人全員で掛け声を出して漕ぎました。ちょうどこの日は大潮で水面が下がっている時間でしたが、水はきれいな方で匂いも無く快適でした。呑川の会も5人乗船しました。1番始めの船はテストでJR鉄橋をくぐり馬引橋の手前まで行きました。



珍しい写真が撮れましたので報告します。この企画は、「呑川をきれいにし・遊び隊 実行委員会」で、川の中からお花見しようということでしたが、桜の開花遅れで2分咲き位で残念でしたが、最後にボートに乗り、大きな網でゴミをすくってゴミ袋で回収していました。

## 呑川流域ネットワーク連絡協議会への改称と世話人選出

(福井 甫 記)

これまで呑川の会、パルシステム東京・南部環境委員会、NPO 法人福祉コミュニティ大田、それに個人会員からなる「呑川をきれいにする会」として大田区との意見交換、下水道に関するシンポジウム開催等の諸活動を行ってきましたが、今後呑川流域の市民団体、その他呑川に関心のある自治会、企業も加わったより広く活動するため、名称を変更しましたのでご報告いたします

新名称 呑川流域ネットワーク連絡協議会 (略称呑川ネット)



旧名称 呑川をきれいにする会

なおそれに伴い呑川流域ネットワーク連絡協議会の世話人を新たに次の通り選出しました。

代表 岡 禮子 (NPO 法人福祉コミュニティ大田)  
副代表 城戸菜穂子 (パルシステム東京・南部環境委員会)  
福井 甫 (呑川の会)  
会計 宮田孝子 (パルシステム東京・南部環境委員会)  
会計監査 白石琇朗 (呑川の会)  
村本恵子 (パルシステム東京・南部環境委員会)  
世話人 工藤英明 (呑川の会)  
々 菱沼公平 (呑川の会)  
々 館野せつ子 (パルシステム東京・南部環境委員会)

## 善福寺川を水鳥の棲む環境に！

(福井 甫 記)

### --- 杉並区の実践 ---

今年の2月7日の朝日新聞に善福寺川に「水鳥を呼ぼう」という記事が掲載されていたので、気づかれた方も多いと思いますが、杉並区では善福寺川に水鳥を呼ぼうと“善福寺川「水鳥の棲む水辺」創出事業”を立ち上げました。



写真は 善福寺川 和田掘り公園付近

そもそものきっかけは15年ほど前から続いている杉並区の小学校から鳥取県日野町のオシドリ保護団体へのドングリ送りの活動で、同じような水鳥保護活動が善福寺川でもできないかという2007年2月の区民の提言を区で受け止め、事業化の検討を開始したとか。

そのため昨年 前橋工科大学の土屋十園教授を会長に11名の委員による検討懇談会が設置され、今年1月に提言がまとめられました。(提言の内容は杉並区のHPからサイト内検索 “善福寺川「水鳥の棲む水辺」創出事業” でみる事ができます。)

その中で目標とする目指すべき水辺環境について、次のように述べるとともに、8つの提言をされています。

潤いと安らぎのある水辺とは、豊かな湧水に恵まれた美しい川の流れがあり、そこに多様な動植物が生息・生育するような水辺ではないでしょうか。そして、区民が、身近な場所でこうした水辺に触れられ、潤いと安らぎを実感できることが理想ではないでしょうか。

また、川のみでなく、川沿いの流域に広がる公園・緑地・学校、神社やお寺、団地などの貴重な自然にも目を向ける必要があるでしょう。点から線、線から面へと川から発する豊かな自然の広がりとそのつながりを意識して取り組むことが重要と考えます。

そして2月7日にそのキックオフとして杉並区主催のシンポジウムが開催されました。シンポジウムはまず杉並区長の挨拶のあと、元NHKアナウンサーですぎなみ地域大学学長の松田輝雄氏の基調講演、検討懇談会委員を中心にした8人のパネリストによるパネルディスカッションが行われてます。基調講演とパネルディスカッションとの間にヴァイオリン、ハーブ、チェロのよりプチコンサートが開かれるおしゃれなものでした。参加者は120名を超える盛況。

善福寺川と呑川では事情が異なる点も多いですが、大きく都市河川という意味では共通点も多いでしょう。

具体的な活動に期待し、今後も注目してゆきたいと思います。

## 呑川沿岸（工大橋～河口）の樹木

（可児 昭雄 記）

### --- クスの木 編 ---

桜の花が散ると落葉樹の芽吹きが始まり、だんだんと新緑が美しくなる季節になる。それと共に常緑樹の衣替えが始まる。

その常緑樹の中で大木になり、大田区の公園等や呑川菖蒲橋下流右岸に並木として植えられている大田区の樹木「クスの木」がある。その理由は「常緑の葉は陽光に美しく映え、公害にも強く、成長早く、たくましい樹形は風格ある高木となる。発展する大田区の木として、誠にふさわしいものです。」とされ、昭和51年12月2日に「区の木」として制定された。



「クス」は高さ40mにもなる暖帯の樹木で、九州・四国から本州南部の暖地に多く分布し、人工林が多く天然の自生地ははっきりしていない。樹齢は1,500～2,000年ともいわれる。

また若葉が特に美しく、葉柄が赤くなり全体が赤っぽく見ると「アカクス」そして青いと「アオクス」と呼ぶことがある。

用途は防虫剤として樟脳を得ていたため、家具・船・建築・彫刻材等として使用されている。

クス   クスノキ科  
          常緑樹  
          公害に強い  
          呑川沿岸 54本

参考文献：

「中公新書」発行 辻井達一著 「日本の樹木」  
「クラブ社雑学シリーズ」鈴木啓三著「木と森の雑学」

[旭橋下流左岸の遊歩道・新緑の楠]



# 「呑川」の母は「多摩川」・・・

## そして「目黒川」とは兄弟

(高橋 光夫 記)

### 呑川の成立を探る

東京湾さえ干上がり、すべて陸地となった「ヴェルム氷期」(約3万年前)。

その東京湾のど真ん中に「古東京川」が流れ、「荒川」も「利根川」も「多摩川」さえその支流だった時代に、湧水の流れを集め、台地を浸食し多くの中小河川が成立したといわれています。

「呑川」もまたそんな川の一つで、旧石器時代に出来上がったと想像されています。

しかし実際はどうなのか・・・最近の地質調査や「水文学」の結果から追ってみましょう

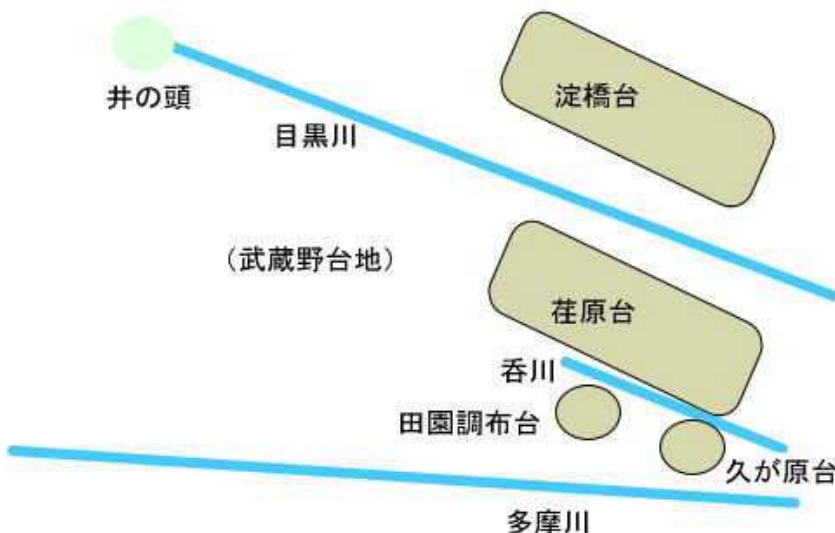


4/4の「目黒川お花見ウォーキング」で「川の資料館」に寄りました。床に「目黒川集水域図」が貼ってあり、「呑川」と比べ、その広さにはビックリです。最近の集水域図は下水管が集める領域が多いのですが、聞いてみると「浸水実績」から作った図といひます。大川に近い集水域・・・その裏にきっと何かあるはずです。



ウォーキングの途中で「目黒川荏原調節池」という巨大地下施設に寄りました。「目黒川は大きな盆地のように水を集め、五反田付近が氾濫するのを防ぐ」のだそうです。「大きな盆地のように」・・・やはりこの地形に特別の意味があるようです。そこでこの施設を造った時に地質調査したデータをいただくことにしました。

あらためて目黒川の集水域を見ると、その西側先端部はなんと三鷹市の「井の頭公園」にあります。



ここは「古多摩川」が流れていたと知られているところです。まさにこの集水域は「古多摩川」が形作り、武蔵野台地の東側先端部の「淀橋台」と「荏原台」を分けているのです。そしてこの時代の地殻変動を見てみると、この2つの台地は隆起を続けましたが、「淀橋台」の方が大きく持ち上がったのです。(左図は私が概念図を造りましたので、地図的正確さはありません)

そのため「古多摩川」は流路変更を強いられ、荏原台を越え、最初に削ったのが「呑川」なのです。



そして削り残した台地として有名なのが、近代になって高級住宅地となる「田園調布台」なのです。

「古多摩川」が「呑川」の位置を流れていた期間は長くなく、目黒川のような大きな盆地地形を造らなかったようです。

そしてさらに「古多摩川」は現在の場所まで南下し、地殻変動が収まり、今の地形になったのは弥生時代になってからといわれています。

そうすると「古多摩川」が作った跡を私はどうしても見てみたくなりました。

そこで大潮になった4/9の干潮時に再び目黒川に出掛け、水が引いて河床の露出を見てきました。これが「古多摩川」の造った礫層だと思われます。

これをぼーっと見ていると、太古の歴史の中で「古多摩川」が目黒川の谷を造り、呑川溪谷を造り、そこに湧水が集まり、ゆうゆうと流れる姿が目に見えられます。

目黒川「川の資料館」の説明員の方に確認すると、やはり「目黒川は多摩川だった」との認識だそうです。また清水建設の方がこの地域のビル建設に当たって地質調査したとき、このれき層が多摩川のものであったことを解明しています。

ただ、呑川の地勢を知る上で、目黒区緑が丘の東工大寮の露頭調査からは、れき層の石は多摩川のものと思われるだけでなく、相模川のものと思われるものが含まれているようで、太古の歴史は謎を含んでいます。こうして追ってゆくのは楽しいものです。

(参考文献)

①「呑川は流れる・2004」(呑川の会) ②「東京の自然史」(貝塚爽平 紀伊国屋書店) ③「地下水の世界」(榎根勇 NHK ブックス) いずれも絶版になり図書館で探すほかありません。現在出ている本で「呑川」について触れられた本を見つけることは出来ませんでした。

また、「川の博物館」の方に話を聞き、都二建の方から地質資料をいただきました。

## 呑川改修「その5工事」(八幡橋～仲之橋の上流側半分) 完了



昨年6月からほぼ11ヶ月を掛けた工事が終わりました。

その間、大雨による濁流に呑み込まれ1名の方が犠牲になる痛ましい事故もありました。兩岸の鋼矢板と自然河床は全てコンクリートに覆われました。

ただ河床に大きな湧水孔が2ヶ所に設けられ、植栽コンテナが河床の両側に並べられる予定です。

それが生きものたちに良い環境を与えてくれると良いのですが・・・

## <編集後記>

・「呑川」の河川改修は「その5」が完了し「その6」へ・・・その大きな変貌は生きものたちにどんな影響を与えるでしょう。6月に行われる「呑川シンポジウム」が楽しみです。(今回編集: 高橋光夫)